

一般演題 D₅ 消化管ホルモン

262. 胃・十二指腸潰瘍の胃酸分泌および血清ガストリンの変動について

兵庫医科大学 第4内科

菅原 貴子 三川 清 大浜 康
鹿野 真勝 大野 忠嗣 西村 正二
下山 孝

消化性潰瘍の発生や病態生理の解明、さらに治療方針の選定に当って、胃前庭部から分泌される gastrin の刺激による胃酸分泌反応を知ることは極めて重要なことと考えられる。

私達は、レ線的、内視鏡的に活動性潰瘍と診断された十二指腸潰瘍15例、胃潰瘍8例を対象に、antral function test (胃前庭部肉エキス刺激) および gastrin test (tetragastrin 4μg./kg. i.m.)、insulin test (regular insulin 0.2u./kg. i.v.) の3種の胃液検査を行ない、胃酸分泌と血清ガストリンの変動を検索した。胃液は持続吸引にて採取し、酸度を automatic titrator で測定した。血清ガストリンは C.I.S. kit を用いて測定した。

その結果、刺激胃酸分泌は gastrin test, insulin test では十二指腸潰瘍、胃潰瘍間に有意差がなく、antral function test では十二指腸潰瘍で胃潰瘍より有意の高値を示した。

また、刺激血清ガストリン値は、insulin test, antral function test ではともに十二指腸潰瘍で胃潰瘍より有意の高値を示した。しかし、basal level よりの比較でみれば、胃潰瘍では、insulin test, antral function test とともに有意の上昇はなく、十二指腸潰瘍では insulin test で有意の上昇はないが、antral function test で有意の上昇を示した。

以上の結果より、十二指腸潰瘍は胃潰瘍より antral mechanism が sensitive であると推察された。

263. 脾障害のインスリンとガストリン分泌の相関

京都大学 第1外科

藤堂徹一郎 鈴木 敏 真辺 忠夫
小原 弘 松岡 国雄 梶原 建熙
本庄 一夫

急性脾障害に際して、胃液分泌亢進や上部消化管出血を来たすが、その機序は不明確である。この点に関し、内分泌面より実験的、臨床的に検討を加えた。そこで急性脾炎時のインスリン血中逸脱現象に着目し実験的急性脾炎時のガストリン値の動向を検索した。さらに臨床的に胃切除例について、術前後におけるインスリン、ガストリン値の相互の推移を観察し、両者の相関関係について考察を加えた。

成熟家兎を用い結紮脾管内に胆汁単独および、トリプシン、胆汁混合液を注入して、軽症、重症両脾炎を作成後、経時的に CIS の KIT を用いて、血中インスリン (IRI)、血中ガストリン (IRGA) を測定し、単純結紮群と比較した。単純結紮群は IRI, IRGA 共にほとんど上昇しないが、脾炎群では両群共に IRI は作成30分後に前値の300～500%の一過性の上昇を示し、この上昇率は重症群の方が著明であった。また IRGA は両群共作成後3時間で前値の約180%の上昇を示し、重症群は高値のまま持続した。この IRI と IRGA の相関の解明のため外因性インスリン刺激による IRGA の変動をみると刺激後約1時間で高度の IRGA の一過性の上昇が観察された。さらにこのガストリン分泌母地を検索するため、胃切除例で術前および術後2週間目に50g GTT により両者の関係をみた。術前では血糖及び IRI の上昇後に遅れて IRGA が上昇するが、胃切除後は IRI は上昇するにもかかわらず、IRGA は全く変動を示さず終始低値のままであった。以上の事実より急性脾炎時にはまず IRI が上昇し、この IRI が IRGA 放出に重要な役割を演じていると思われる。またこの IRGA の上昇は胃源性ガストリンによるものと考えられる。